

11.28 [水]

第583回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演

Subscription Concert, No. 583
Wednesday, 28th November, 19:00 / Suntory Hall

指揮/デニス・ラッセル・デイヴィス Conductor DENNIS RUSSELL DAVIES P.6

フルート/エマニュエル・パユ Flute EMMANUEL PAHUD P.8

ハープ/マリー=ピエール・ラングラメ Harp MARIE-PIERRE LANGLAMET P.8

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

スロヴァチエフスキ ミュージック・アット・ナイト [約17分] P.12
SKROWACZEWSKI / Music at Night

- I. Allegro drammatico
- II. Moderato. Drammatico e rubato
- III. Allegro misterioso - Rallentando al Largo
- IV. Allegro molto - Doppio meno mosso

モーツァルト フルートとハープのための協奏曲
ハ長調 K.299 (297c) [約30分] P.14
MOZART / Flute and Harp Concerto in C major, K. 299 (297c)

- I. Allegro
- II. Andantino
- III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ジョン・アダムズ シテイ・ノワール [約35分] P.15
JOHN ADAMS / City Noir

- I. The City and its Double - II. The Song is for You
- III. Boulevard Night

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会



[協力] アフラック
平成30年度(第73回)文化庁芸術祭協賛公演

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

12.4 [火]

第20回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール/19時30分開演(18時50分から解説)

Yomikyo Ensemble Series, No. 20
Tuesday, 4th December, 19:30 (Pre-concert talk from 18:50) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》

ピアノ/上岡敏之 Piano TOSHIYUKI KAMIOKA

ヴァイオリン/赤池瑞枝、荒川以津美、山田友子
Violin MIZUE AKAIKE, IZUMI ARAKAWA, YUKO YAMADA

ヴィオラ/長岡晶子、渡邊千春
Viola AKIKO NAGAOKA, CHIHARU WATANABE

チェロ/松葉春樹、室野良史
Cello HARUKI MATSUBA, YOSHIFUMI MURONO

ナビゲーター/鈴木美潮(読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

ブラームス ピアノ四重奏曲 第3番 ハ短調 作品60 [約33分]
BRAHMS / Piano Quartet No. 3 in C minor, op. 60

[休憩 Intermission]

マーラー ピアノ四重奏曲 断章 イ短調 [約12分]
MAHLER / Piano Quartet in A minor

ボロディン ピアノ五重奏曲 ハ短調 [約22分]
BORODIN / Piano Quintet in C minor

文化庁委託事業「平成30年度 戦略的芸術文化創造推進事業」
[主催] 文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団



12.19 [水]	FUJITSU Presents Concert 〈第九〉特別演奏会 サントリーホール／19時開演 Special Concert, presented by FUJITSU Ltd. Wednesday, 19th December, 19:00 / Suntory Hall
25 [火]	SHINRYO Presents 〈第九〉特別演奏会 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 Special Concert, presented by SHINRYO Tuesday, 25th December, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

- 指揮／マッシモ・ザネッティ Conductor MASSIMO ZANETTI P.7
 ソプラノ／アガ・ミコライ Soprano AGA MIKOLAJ P.9
 メゾ・ソプラノ／清水華澄 Mezzo-Soprano KASUMI SHIMIZU P.9
 テノール／トム・ランドル Tenor TOM RANDLE P.10
 バス／妻屋秀和 Bass HIDEKAZU TSUMAYA P.10
 合唱／新国立劇場合唱団 Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS P.11
 合唱指揮／三澤洋史 Chorusmaster HIROFUMI MISAWA P.11
 特別客演コンサートマスター／日下紗矢子
 Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

【第1部】〈ア・カペラ合唱〉

指揮／三澤洋史 Conductor HIROFUMI MISAWA
 合唱／新国立劇場合唱団 Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

- J. S. バッハ モテット 第1番〈新しい歌を
 主にむかって歌え〉 BWV225 [約15分] P.21
 J. S. BACH / Motet "Singet dem Herrn ein neues Lied" BWV225

[休憩 Intermission]

【第2部】〈第九〉

- ベートーヴェン 交響曲 第9番
 ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] P.18

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

- I. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
 II. Molto vivace
 III. Adagio molto e cantabile
 IV. Presto - Allegro assai

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [協賛] 富士通株式会社 (12/19)
 [特別協賛] 新菱冷熱工業株式会社 (12/25)
 [事業提携] 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団) (12/25)

※12月19日公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

12.20 [木]	第617回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 617 Thursday, 20th December, 19:00 / Suntory Hall
22 [土]	第212回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 212 Saturday, 22nd December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
23 [日・祝]	第212回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 212 Sunday, 23rd December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
24 [月・休]	第108回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 108 Monday, 24th December, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

※19日、25日は前ページをご覧ください。

- 指揮／マッシモ・ザネッティ Conductor MASSIMO ZANETTI P.7

※他の出演アーティストは前ページをご参照ください。

- ベートーヴェン 交響曲 第9番
 ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] P.18

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

※詳細は前ページをご参照ください。

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [共催] 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団) (12/22、23)
 [協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (12/22)
 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会
 [協力] 横浜みなとみらいホール (12/24)



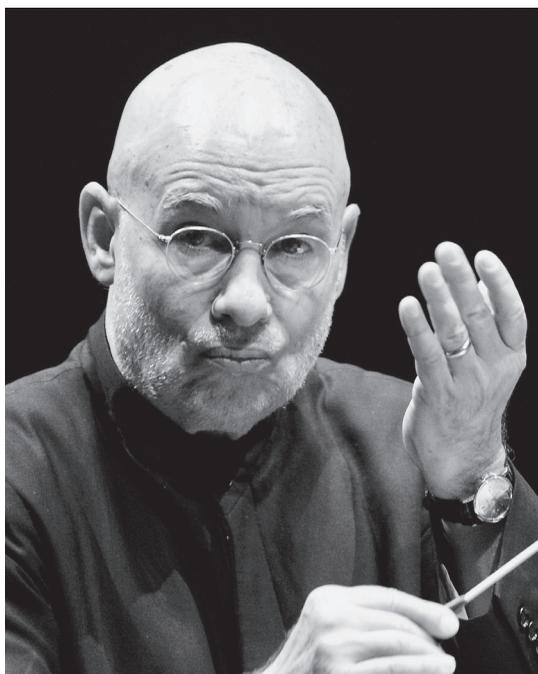
デニス・ラッセル・デイヴィス

Dennis Russell Davies

アメリカの鬼才が振る
ジョン・アダムズの話題作

ドイツ・オーストリアの名門楽団や劇場で長年にわたり実績を積み上げてきた名匠が、現代アメリカを代表する作曲家ジョン・アダムズの〈シティ・ノワール〉などを披露する。現代音楽にも定評のあるマエストロの、巧みな音楽づくりに注目だ。

1944年アメリカ生まれ。セントポール室内管音楽監督を振り出しに、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督、リンツ・ブルックナー管の音楽監督、シュトゥットガルト室内管、ウィーン放送響、バーゼル響の首席指揮者などを歴任し、現在はチェコ国立ブルノ・フィルの芸術監督及び首席指揮者を務めている。これまでに、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、サンクトペテルブルク・フィルなど世界の一流楽団を指揮。オペラでは、メトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座、ウィーン



©読響

国立歌劇場などで活躍するほか、ザルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭にも出演している。ハイドンなどの古典派からブルックナー、ストラヴィンスキー、フィリップ・グラスまで、幅広いレパートリーを誇る。特に現代音楽の分野では数々の世界初演を手掛けており、近年ではリンツ州立歌劇場でグラスの歌劇〈迷える者の跡〉の世界初演を成功に導いた。

録音はハイドン、ブルックナー、グラスの交響曲全集のほか、ホルストの〈惑星〉やストラヴィンスキーの管弦楽作品集、多数の現代オペラなどがある。

◇11月28日 定期演奏会

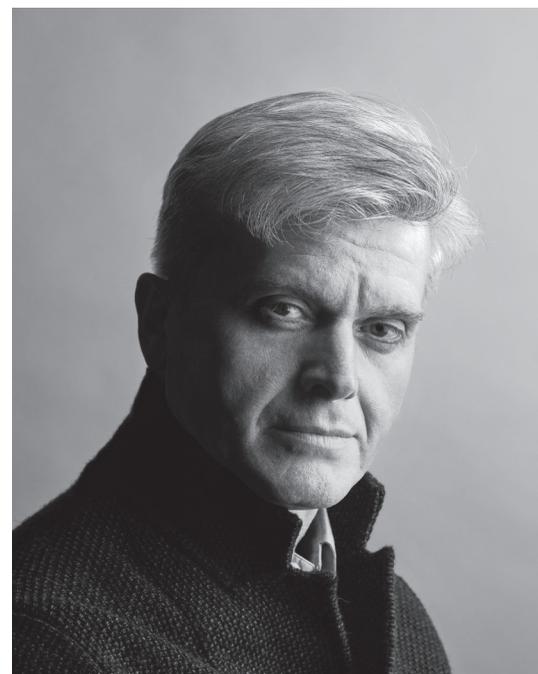
マッシモ・ザネッティ

Massimo Zanetti

イタリアの名匠
〈第九〉で読響初登場

今年の〈第九〉を指揮するのは、読響初登場となるイタリアの名匠。欧州を中心にオペラとコンサートの両方で活躍しており、豊富な経験に裏付けられたドラマティックな演奏を聴かせてくれるだろう。輝かしく響きわたる“歓喜の歌”が楽しみだ。

1962年イタリア生まれ。これまでにドレスデン国立歌劇場で新演出の〈カルメン〉〈オテロ〉〈フィガロの結婚〉を指揮したほか、ベルリン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、バイエルン国立歌劇場、チューリヒ歌劇場、パリ・オペラ座、ローマ歌劇場、バルセロナ・リセウ大劇場など世界各地の一流歌劇場に招かれている。パルマのヴェルディ音楽祭にもたびたび出演しているほか、ウィーン響、ベルリン放送響、ベルリン・コンツェルトハウス管、NDRエルプフィル（ハンブルク北ドイツ放送響）、フランス放



©Hyperactive Studios

送フィル、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、バーミンガム市響、バンベルク響など多くの著名なオーケストラとも共演を重ねている。2002年までベルギー王立フランドルス歌劇場の音楽監督を務め、18年9月には韓国キョンギ・フィルの音楽監督に就任した。録音には、デッカからリリースされたヴェルディ〈シモン・ボッカネグラ〉などがある。

今年はベルリン国立歌劇場で〈椿姫〉、キャリアリ歌劇場で〈カルメン〉などを振り、好評を博した。

◇12月19-25日 〈第九〉公演



©Josef Fischnaller licensed to EMI Classics

フルート エマニュエル・パユ

Flute Emmanuel Pahud

ジュネーヴ生まれ。パリ国立高等音楽院でM.デポスト、A.マリオン、C.ラルデ、P-Y.アルトに師事。同音楽院卒業後はバーゼルのA.ニコレの下で研鑽を積んだ。神戸国際コンクール第1位、ジュネーヴ国際コンクール第1位などを受賞。1993年ベルリン・フィルの首席奏者に就任。ソリストとしてベルリン・フィル、バイエルン放送響、ロンドン響、フランス国立管などと共演。EMI（現ワーナー）と専属契約を結び、多くのCDをリリース。ラングラメとの『モーツァルト：フルートとハーブのための協奏曲』は名盤として名高い。

◇11月28日 定期演奏会



©Jim Rakete

ハープ マリー=ピエール・ラングラメ

Harp Marie-Pierre Langlamet

フランス生まれ。8歳でニース音楽院に入学、15歳でマリア・コルチンスカ国際コンクールの最高位を受賞。翌年、シテ・デザール国際コンクールで優勝。17歳でニース歌劇場管の首席ハーブ奏者に就任後、カーティス音楽院で研鑽を積む。メトロポリタン歌劇場管の副首席奏者を務め、イスラエル国際コンクールなどで優勝。1993年ベルリン・フィルの首席ハーブ奏者に就任。ソリストとしてベルリン・フィル、イスラエル・フィル、スイス・ロマン管などと共演。2009年仏芸術文化勲章「シュヴァリエ」を受章。

◇11月28日 定期演奏会



©Wernicke

ソプラノ アガ・ミコライ

Soprano Aga Mikolaj

ポーランド出身。ポズナニ音楽アカデミーとウィーン国立音楽大学で声楽を学ぶ。スヘルターヘンボス声楽コンクールやアルフレード・クラウス声楽コンクール入賞。シュヴァルツコップの薫陶を受け、2002年から07年までバイエルン国立歌劇場の専属歌手を務めた。ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ベルリン国立歌劇場、パリ・オペラ座、英国ロイヤル・オペラ、グラインドボーン音楽祭などに出演。ロイヤル・コンセルトヘボウ管など一流楽団とも共演している。読響には16年の〈第九〉以来、3度目の登場。

◇12月19-25日 〈第九〉公演



©Takehiko Matsumoto

メゾ・ソプラノ 清水華澄

Mezzo-Soprano Kasumi Shimizu

静岡県出身。国立音楽大学、同大学院とも首席で修了。新国立劇場オペラ研修所を経て渡伊。2007年〈仮面舞踏会〉ウルリカで二期会デビュー。バーデン市立劇場〈こもり〉オルロフスキー、二期会〈ドン・カルロ〉エボリ公女、新国立劇場及び中国国家大劇院〈アイダ〉アムネリス、日生劇場〈ルサルカ〉イェジババなどで絶賛された。コンサートでは、マーラーやR.シュトラウスなどで主要楽団と多数共演。18年は東京二期会〈ローエングリン〉オルトルートなどに出演。また、6月には初のリサイタルを開催した。二期会会員。

◇12月19-25日 〈第九〉公演



©Clare Park

テノール トム・ランドル

Tenor Tom Randle

指揮・作曲を専攻した後、声楽に転向。〈魔笛〉タミーノ役でイングリッシュ・ナショナル・オペラにデビュー後、ベルリン・ドイツ・オペラ、グラインドボーン音楽祭などで同役を務め大きな成功を収める。ベルリン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラにも出演。バレンボイム、コリン・デイヴィスらの指揮で、ボストン響、シカゴ響など著名楽団とも共演している。バロックをはじめ、ロマン派から現代音楽作品まで幅広いレパートリーを誇る。藤倉大の歌劇〈ソラリス〉の世界初演及び2018年10月の日本初演でスナウト役を務めた。

◇12月19-25日〈第九〉公演



バス 妻屋秀和

Bass Hidekazu Tsumaya

東京芸術大学卒業、同大学院修了。イタリア留学を経て、1994年から2001年までライブツィヒ歌劇場、02年から11年までワイマール歌劇場の専属歌手を務めた。ベルリン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、新国立劇場などに客演し、日本を代表するバスとしての名声を確立した。今年でオペラデビュー30周年を迎え、これまでに出演したオペラは900回を超える。17年11月〈アッシジの聖フランチェスコ〉では兄弟ベルナルドで好評を博した。第24回ジローオペラ賞、第3回ロシア歌曲賞受賞。ライブツィヒ在住。二期会会員。

◇12月19-25日〈第九〉公演

合唱 新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。現在、メンバーは100名を超え、新国立劇場の多彩な演目によりレパートリーを増やしつつある。高水準の歌唱力と演技力を有し、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家から高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

◇12月19-25日〈第九〉公演



合唱指揮 三澤洋史

Chorusmaster Hirofumi Misawa

国立音楽大学声楽科卒業。ベルリン芸術大学指揮科首席卒業。1999～2003年、ドイツのバイロイト音楽祭に祝祭合唱団指導スタッフとして従事。11年には文化庁在外研究員として、ミラノ・スカラ座に3か月滞在。2001年から現在まで新国立劇場合唱団指揮者。その業績が評価され、16年度JASRAC音楽文化賞受賞。

声楽を伴う多くの管弦楽作品に精通し、オペラやオラトリオの指揮なども手掛ける。

◇12月19-25日〈第九〉公演

11.28 [水]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

スクロヴァチェフスキ
ミュージック・アット・ナイト

作曲：1949年、改訂：1960年、1977年／初演：1949年、モンテカルロ／演奏時間：約17分

昨年2月、93歳で死去した読響第8代常任指揮者スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ(1923～2017)は、1978年に読響の招聘で初来日を果たした。以来、読響とは2000年、02年、05年と共演を重ね、2007年に常任指揮者に就任(10年まで)。その後も桂冠名誉指揮者の地位にあった。「ミスターS」の愛称で親しまれるとともに尊敬を集め、多くの聴衆を魅了した。

スクロヴァチェフスキは、1923年、ポーランドのリヴォフ(現在はウクライナ領)に生まれた。早くから音楽的才能を発揮し、11歳でピアニストとしてデビューした。しかし、第2次世界大戦の空襲で手を負傷。ピアニストの道を断念し、地元とクラクフの音楽院で作曲と指揮を学んだ。1947年にシマノフスキ記念作曲コンクールで〈序曲〉が第2位に入賞すると、奨学金

を得て2年間、パリに留学。パリでは作曲をナディア・ブーランジェに師事し、前衛集団「ゾディアク」の創設にも加わった。半音階や音程関係に着目した作風で、ルトスワフスキに続く世代の代表格として期待されたが、留学以前の作品の大半は自ら破棄し、次第に軸足を作曲から指揮へと移していった。

やがて指揮者としての活動が安定すると、再び創作に向かうようになる。指揮者として最後まで現役を貫き、多忙な指揮活動の合間をぬって晩年まで作曲を続け、80曲余りの作品を残した。読響の演奏会でもたびたび自作を取り上げ、2005年〈管弦楽のための協奏曲〉、07年〈ミュージック・アット・ナイト〉、08年〈コンチェルト・ニコロ(左手のためのピアノ協奏曲)〉、10年〈Music for Winds〉(読響・ミネソ

タ管他共同委嘱)、12年〈クラリネット協奏曲〉、13年〈パッサカリア・イマジナリア〉と、若き日の作品から新作まで、さらにバッハ作品の編曲等、オーケストラを知り尽くしたマエストロの筆は、いつも滑らかであった。

〈ミュージック・アット・ナイト〉は、パリ留学中に作曲された。イタリア旅行に出かけたスクロヴァチェフスキは、ヴェネツィア行きの列車に乗るが、ふと思立ちフェッラーラ駅で途中下車した。「駅で荷物を預け、私はフェッラーラの古城に向かった。城内を歩き、ウーゴとパリジーナの悲劇に思いを巡らせていると、急に背筋が寒くなった。すぐさま城を出て、次の列車でヴェネツィアに向かった」。ウーゴとパリジーナの悲劇とは、15世紀の実話で、フェッラーラの侯爵ニコロ3世の息子ウーゴと、ニコロ3世の2番目の妻パリジーナが恋に落ち、それは夫の知るところとなり、二人は城の地下牢につながれ、斬首されてしまう。その愛と死の物語は、古くから小説や詩でも伝えられてきた。続いてヴェネツィアについては「月明りに照らされた夜のサン・マルコ広場を散歩していると、鐘の音が重なり合い、変口音の倍音が力強く響いていた」と回想している。

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、ボンゴ、銅鑼)、ハープ、ピアノ、弦五部

パリに戻り、友人の女性ジャーナリスト、ソーズビーの口利きでモンテカルロのパレエ団のために〈ウーゴとパリジーナ〉を書き、それをもとに〈ミュージック・アット・ナイト〉は作られた。スクロヴァチェフスキによれば、「ひとつの主題に集約できる交響的変奏曲の一種で、四つの部分は切れ目なく演奏される」。1977年に再改訂され、カリフォルニアのカプリロ音楽祭で初演された。

第1部 アレグロ・ドラマティコ 管楽器の和音の連打に低音がうごめく。次第に高まり、悲劇的な色合いを濃くする。

第2部 モデラート、ドラマティコ・エ・ルバート 幻想的なハーブに導かれ、フルートの高音がうごめく低音と対比させられる。

第3部 アレグロ・ミステリオソ〜ラレンランド・アル・ラルゴ 打楽器のリズムと勢いよく駆け上がるピッツィカート为背景に管楽器が朗々と旋律を歌う。最後はゆるやかに弱音となる。

第4部 アレグロ・モルト〜ドッピオ・メノ・モッソ 弦楽器が力強く主張し、打楽器は快活なリズムを強調する。やがて静かに落ち着き、悲劇の終わりを告げる。

ジョン・アダムズ シティ・ノワール

作曲：2009年／初演：2009年10月8日、ロサンゼルス／演奏時間：約35分

アダムズの作品のなかでとりわけ注目されるのは、演出家ピーター・セラーズ（1957～）と組んで発表した数々のオペラである。ニクソン大統領と毛沢東主席の歴史的会談を扱った〈中国のニクソン〉（1985～87）、パレスチナ・テロリストのシージャック事件を題材とした〈クリングホファーの死〉（1990～91）、原爆の父とされるオッペンハイマー博士とその周辺の人たちの苦悩を描いた〈ドクター・アトミック〉（2004～05）などで、常にセンセーショナルな話題を提供してきた。そして、2017年は、70歳を迎えたアダムズを記念したコンサートが、ベルリン・フィルをはじめ世界各地で行われ、11月には、サンフランシスコ歌劇場から委嘱された新作オペラ〈黄金の西部の娘たち〉がセラーズの演出で初演された。

〈シティ・ノワール〉は、2009年に、グスターボ・ドゥダメルグスターボ・ドゥダメルのロサンゼルス・フィルハーモニック音楽監督就任を記念して書かれた。作曲にあたっては、カリフォルニアの文化と歴史を描いた、南カリフォルニア大学教授で歴史学者のケビン・スター（1940～2017）の大著『ドリーム』（全6巻）の中の「1940～50年代のカリフォルニアの戦

現代アメリカを代表する作曲家のひとり、ジョン・アダムズ（1947～）は、東海岸のニューイングランド地方に生まれ育った。クラリネット奏者として活動するとともに、ハーバード大学でキルシュナーキルシュナーらに師事してアカデミックな作曲技法を学び、大学卒業後は、活動拠点を西海岸のサンフランシスコに移した。同地の音楽院で教鞭きょうべんを執りながら創作活動を続け、1970年代後半からポスト・ミニマル（ライヒやグラスが開拓した音型反復を基本とするミニマル音楽の新世代）の作曲家として注目を集めた。初期の作品こそライヒらの影響もみられるが、やがてその発想を飛躍させ、反復を組織的に展開させる手法にたどりついた。

1982～85年にサンフランシスコ交響楽団のレジデンス作曲家を務め、〈ハーモニウム〉（1980～81）、〈グランド・ピアノラ・ミュージック〉（1982）、〈ハルモニーレーレ（和声学）〉（1984～85）といった大規模で大胆な管弦楽曲を次々と完成させ、作曲家としての地位を確立した。〈ハルモニーレーレ〉は、2015年の読響定期で、日本初演以来29年ぶりに下野竜也の指揮で取り上げられ、話題を集めた。

モーツァルト フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K. 299 (297c)

作曲：1778年4月／初演：不明、パリ／演奏時間：約30分

1777年9月、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、ザルツブルク宮廷楽団の職を辞して、母親とともにマンハイム・パリ旅行に出かけた。この1年4か月に及ぶ旅の目的は、新しい就職先を見つけることだったが、彼にふさわしいポストはどこにもなかった。それでもマンハイムではヨーロッパ随一とされた宮廷楽団の水準の高さやダイナミックな表現に刺激を受け、パリでは交響曲を作曲し、公開演奏会で喝采を浴びた。当初の目的は果たせなかったものの、その後のモーツァルトの管弦楽法に影響を与える経験や多くの名作が生まれるなど、音楽的には実りの多い旅であった。

ところで、モーツァルトは多くの協奏曲を書いたが、ピアノやヴァイオリンの大半は彼自身の演奏のため、管楽器の協奏曲は親しい友人や特定の演奏家のため、あるいは依頼を受けて書かれることもあった。フルートとハープのための協奏曲は、パリ滞在中に音楽愛好家のド・ギーヌ伯爵（後の公爵）からの依頼で作曲された。彼はフルートが趣味の外交官で、ハープを嗜む令嬢は、モーツァルトから作曲のレッス

ンを受けていた。この親子の腕前はモーツァルトも認めていて、特に娘のハープの演奏は「すばらしい」と述べている。フランスの上流階級で愛好されていた二つの楽器を組み合わせた協奏曲は、こうした偶然から生まれた。

モーツァルトの作品のなかでもとりわけ優雅に鳴り響くこの曲は、音楽愛好家のためとあってハ長調という基本的な調性で書かれ、転調や手の込んだ構成はあまりなく、強弱の対比や新しい楽想を次々と登場させることで変化をつけている。初演等の詳細は不明だが、おそらく貴族の城館の大広間で、小編成のオーケストラの伴奏で演奏されたのであろう。その典雅な音楽からは、貴婦人が集うパリの贅沢なサロンの様子を思い浮かべることができる。

第1楽章 アレグロ、ハ長調 独奏楽器を加えたオーケストラで力強く始まる。**第2楽章** アンダンティーノ、ハ長調 伴奏は弦楽器のみで、フルートとハープの優雅な音色がいつそう強調される。**第3楽章** ロンド、アレグロ、ハ長調 軽やかなロンド主題の間に新しい楽想がはさまれ、華やかに盛り上がる。

楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏フルート、独奏ハープ

争と平和」と副題の付いた巻(2002)の第8章「1947年、ブラック・ダリア」から着想を得ている。ブラック・ダリアとは、ロサンゼルスで起きた猟奇殺人事件で、著書では1947年を象徴する出来事として挙げられた(この年は作曲者の生年でもある)。アダムズは、「フィルム・ノワール(犯罪映画)」の題材になるような事件が起きた街のエネルギーや、時代の空気感を音楽に映し出したかった、と述べている。また、アダムズにとっての「シティ」は、「単なる地理的な場所や社会的集合体ではなく、尽きることのない官能的な経験の源」とも。さらに、1920年代の、いわゆるシンフォニック・ジャズのような、オーケストラとジャズを結び付けるアメリカの伝統にも刺激を受け、ここではジャズ的な要素が音楽全体にちりばめられている。

全体は3楽章から成り、六つの楽器(アルトサクソフォン、トランペット、トロンボーン、ホルン、ヴィオラ、コントラバス)が独奏で活躍する。

第1楽章「都市とその分身」 このタイトルは、フランスの劇作家アントナン・アルトーの著作『演劇とその分身』を意識して付された。金管楽器の持続音のもとで木管楽器と弦楽器が3連符

の素早い音型で繰り返す開始に続いて、ドラムの規則的なリズムが、ジャズの世界へと導く。アルトサクソフォンが大活躍し、ジャズ風のリズムが折り重なる。弦楽器のゆったりとした叙情的な部分をはさみ、その後、再び熱を帯び、やがて金管くまびの楔を刺すような響きが旋律の流れを中断させる。音楽は混沌とし、熱狂的な終結に突然の静寂が訪れる。トランペットの持続音を橋渡しに第2楽章へ。

第2楽章「この歌はあなたのために」 弱音がさざ波のように広がる。色彩豊かな響きからサクソフォンの旋律が浮かび上がり、そこにトロンボーンが加わる。後半の強迫的なリズムと求心的なエネルギーのぶつかりは、まさにジャズのセッションである。再び穏やかな音楽が戻り、最後は、ホルンとヴィオラの哀しげな音色が響く。

第3楽章「ブルバード・ナイト」 トランペット独奏が、夜の情景を思わせる物憂げな旋律を静かに奏でる。弦楽器の断続的なリズムが反復され、サクソフォンがしなやかに、くねるような旋律を繰り返す。さわやかな弦楽器の旋律をはさむが、そこは「熱帯夜の夜更けのストリート」。最後は金管ほうの咆哮こわとサルサのリズムで締め括られる。

楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3(バスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、ドラムセット、ティンパレス、クロティル、タンブリン、カウベル、シロフォン、マリンバ、グロックケンシュペール、ヴィブラフォン、ボンゴ、木魚、クラベス、カスタネット、コンガ、鐘、銅鑼、ゴング)、ハーブ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部

12.19-12.25

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

ベートーヴェン

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉

作曲：1818年頃～24年／初演：1824年5月7日、ウィーン、ケルトナートーア劇場／演奏時間：約65分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827) は、ドイツ中西部のライン河岸のボンに生まれた。宮廷音楽家の父から音楽の手ほどきを受け、さらに1782年からは作曲家ネーフェに学んだ。尊敬するモーツァルトに師事すべく1787年にウィーンを訪れるも、母の危篤の知らせを受け、ベートーヴェンは急遽ボンへ戻ることを余儀なくされる。彼は1792年、ロンドンからの帰路にボンへ立ち寄ったハイドンと会い、その年のうちにウィーンへ移り住む。ピアノの名手として人気を誇ったベートーヴェンは、ハイドンに師事したのち、アルブレヒツベルガーらに作曲を学ぶ一方で、裕福な貴族の音楽愛好家らから支援を受けて作曲に専念した。

ベートーヴェンは1800年に交響曲第1番を完成させる。交響曲第8番を1812年に書き上げてから、彼は10年もの間、交響曲の創作から遠ざかる。それは、社会の変動と密接に結びついていた。1814年から15年にナポレオ

ン戦争の戦後処理のためにウィーン会議が開かれ、その頃から社会は大きな変化を遂げていった。ウィーン会議後のウィーンでは、ビーダーマイヤー文化と呼ばれる小市民的な文化が花開き、大衆的な音楽が満ちあふれるようになる。

しかし、ベートーヴェンはそうした大衆文化に背を向けるかのように、崇高にして難解な作品を生み出してゆく。1815年以降の彼の創作は、とくに後期様式と呼ばれ、この時期のピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲では、フーガなどのバロック時代の書法が創作に取り入れられた。交響曲第9番が作曲されたのは、後期の弦楽四重奏曲の創作時期にあたり、例えば第2楽章はフーガで書かれているほか、第4楽章では壮大な合唱フーガが用いられている。

この交響曲では、ベートーヴェンは第4楽章に中心を置いた。また、交響曲に合唱を加える手法も斬新であった。この手法は、メンデルスゾーンやリスト、マーラーの交響曲へと受け継がれてゆく。

交響曲第9番には、「シラーの^{しょうか}頌歌『歓喜に寄せる』をフィナーレの合唱にもつ」というサブ・タイトルがある。シラーの『歓喜に寄せる』という詩は、1785年5月に開かれたフリーメーソンの会員の集いのために書かれたものである。詩の題名の「歓喜」という言葉は、もともとは「自由」と記されていた。しかし、検閲を恐れて詩の内容も含めてシラーが書き換えたのだ。ちなみに、ベートーヴェンがこの詩を知ったのは、シラーと友人関係にあったボン大学の教授フィッシュエニヒを通してである。

シラーのもともとの詩は、「詩節」と「コーラス」の二つの部分で構成されているが、ベートーヴェンは詩節とコーラスを自由に配置するだけではなく、テキストの冒頭に「おお 友よ この調べではない！ さらに心地よく 喜びにあふれる歌を とともに歌おう！」と、自身による詩句を書き加えた。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ、ウン・ポコ・マエストーソ 二短調。深い森のなかから鳴り響いてくるかのような五度音程の動機で音楽は始まる。静けさを湛^{たた}えた冒頭部分に続き、第1主題が厳かに現れる。続いて第2主題は、変ロ長調でいくぶん穏やかに示される。この楽章は、コントラストをなす二つの主題を用いて展開さ

れる。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ 二短調。ベートーヴェンは、交響曲の中間楽章にスケルツォを取り入れており、この第2楽章も軽快な楽想からスケルツォを想定して作曲したと思われる。リズム的な序奏に導かれ、スケルツォ主題が現れる。カノンのな書法が用いられており、活気あふれる楽章。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ 変ロ長調。ゆったりとした情趣の変奏曲形式の楽章。まず、第1ヴァイオリンが主要主題を奏でてゆく。副主題は二長調で、第2ヴァイオリンとヴィオラによって叙情的に歌われる。二つの主題の変奏が交互に現われたのち、主要主題が回帰する。

第4楽章 プレスト 二短調 ～アレグロ・アッサイ 二長調。まず、序奏では前3楽章の主題が回想される。そして、ただちに低弦楽器によるレチタティーヴォが入ってくる。このように、第4楽章にはオペラを連想させるような劇的な表現がみられる。主部では二長調に転じると、低弦楽器がおおらかに主要主題を歌い上げ、この主題はさまざまなパートへ受け継がれてゆく。フィナーレにはフーガ書法や軍楽隊の音楽など、多様な表現が含まれている。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル)、弦五部、独唱(ソプラノ、アルト、テノール、バス)、合唱

第4楽章
An die Freude
「喜びに」

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere!

おお 友よ この調べではない！
さらに心地よく 喜びにあふれる歌を ともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum!
喜び！ 神の閃光 天国の乙女たち！
私たちは 炎に酔いしれて 天国の汝の聖地に 歩を進める！

Deine Zauber binden wieder, Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder, Wo dein sanfter Flügel weilt.
時の流れに激しく引き裂かれた者も 神の不思議な力によって 再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で すべての人々は 同胞となる

Wem der große Wurf gelungen, Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen, Mische seinen Jubel ein!
ひとりの心の友を持つ 心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は 喜びに唱和せよ！

Ja, wer auch nur eine Seele Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle Weinend sich aus diesem Bund!
そうだ、この地上にひとりでも 魂の友を持つ者も ともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は 涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen Folgen ihrer Rosenspur.
すべての被造物は 自然の乳房から喜びを飲み
善人も 悪人も みな 創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben, Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben, Und der Cherub steht vor Gott.
神は 接吻と 葡萄酒と そして 死の試練をくぐった友を 与え給うた
虫にさえも神は快樂を与えた そして天使ケルビムは 神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn, Freudig wie ein Held zum Siegen.
喜びよ 太陽が広い空を 神の定めに従って駆けるように
同胞よ！ 自らの道を喜びをもって進め！ 英雄が勝利に向かって 走るように！

Seid umschlungen Millionen! Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt Muß ein lieber Vater wohnen.
抱き合おう！ 幾百万の人々よ！ この接吻を全世界に！
同胞よ！ 星々の彼方に 父なる神は住み給う！

Ihr stürzt nieder, Millionen? Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt! Über Sternen muß er wohnen.
幾百万よ ひれ伏したか？ 人々よ 創造主を感じるか？
星々の天幕に 神を求めよ！ 星々の彼方に 神は住み給う！

訳：金子哲理

12.19 [水]

12.25 [火]

J. S. バッハ

モテット 第1番〈新しい歌を主にむかって歌え〉 BWV225

作曲：1726～27年、ライプツィヒ／初演：不明／演奏時間：約15分

ヨハン・セバ스티アン・バッハ (1685～1750) はドイツ東部のアイゼナハに生まれ、15歳でリュネブルクの聖ミカエル教会付属学校の給付生となる。そこの聖歌隊で歌う一方、オルガンにも深くかかわるようになり、のちにミュールハウゼンやワイマールなどでオルガン奏者や作曲家として活動。そして、1717年にはケーテンの宮廷楽長を、さらに23年からはライプツィヒの聖トーマス教会カントールを務めた。モテットとは、中世以来作曲された宗

教的な声楽曲。バッハは、ライプツィヒ時代にモテットをいくつか書き上げる。それらは主に葬儀のために作曲された。モテット第1番の用途はわからないが、1726年から翌年にかけて成立したとみられている。このモテットは、詩篇第149番を軸とした歌詞をもち、二重合唱の編成である。作品は三つの部分からなり、第1部は壮麗な歓喜の音楽、第2部は落ち着いた楽想で、二つの合唱の対比が美しい。第3部は8声の生氣あふれるフーガののち、ハレルヤの音楽が続く。

編成／合唱